

# 有田 耕一 さん

熊本県錦町  
株式会社有田牧場 代表取締役

## 創意工夫で良質な和牛を効率的に生産 人との出会いを大切にして技術を学ぶ



経営は一つだが、家業の酪農を弟が継ぎ、兄が新たに黒毛和牛の肉牛生産を広げた。飼養技術は人との出会いを通じて独学。独創的な工夫を重ねて肉質のいい子牛を生産し、収益も抜きん出て高い。熊本県球磨地域の耕種農家と連携し、水田農家と飼料イネの生産と堆肥の地域循環を実現し、地域農業の発展にも一役買っている。

### 兄弟で酪農と肉用牛経営

——社長の耕一さんが肉用牛、弟の和重さんが酪農を担当するという兄弟経営ですね。

**有田** 私は高校を卒業した1994年、18歳のとき、父の経営する牧場で酪農の仕事に就いたのですが、父とそりが合わず、24歳で家を出てし

まいりました。そこで、2歳下の弟が自動車部品メーカーを辞めて父を手伝うことになりました。ところが、2008年に父が急逝してしまっただけです。

当時、私は地元の森林組合で作業員として働いていました。積極的に家業を継ぐ気持ちはなかったのですが、家族会議の末、私が家に戻ることになり、兄弟で畜産経営をやることになったのです。

——酪農と肉用牛の担当を分けたのはなぜですか。

**有田** 私が家業を継ぐに当たり、条件をつけました。まず、兄である私と弟の収入は、同額の給料制とすることになりました。お金のことでめるのは嫌ですからね。それから、採草地を多く持つてお

り自給飼料があったので、経営基盤を強化するために肉用牛、実際には黒毛和牛を増やすことにし、酪農部門は弟、肉用牛部門は私が担当することになりました。

2人で同じ管理をすると、この仕事は弟がしたはずだとか、逆に兄貴がしたはずだとか、責任の所在がいまいになつたり、作業がダブつたりしがちになります。そこで、経営は一つだけけど、管理は部門ごとに完全に分けることにし、お互いがそれぞれの作業に責任を持つことになりました。

### 飼養技術は「出会い」で学ぶ

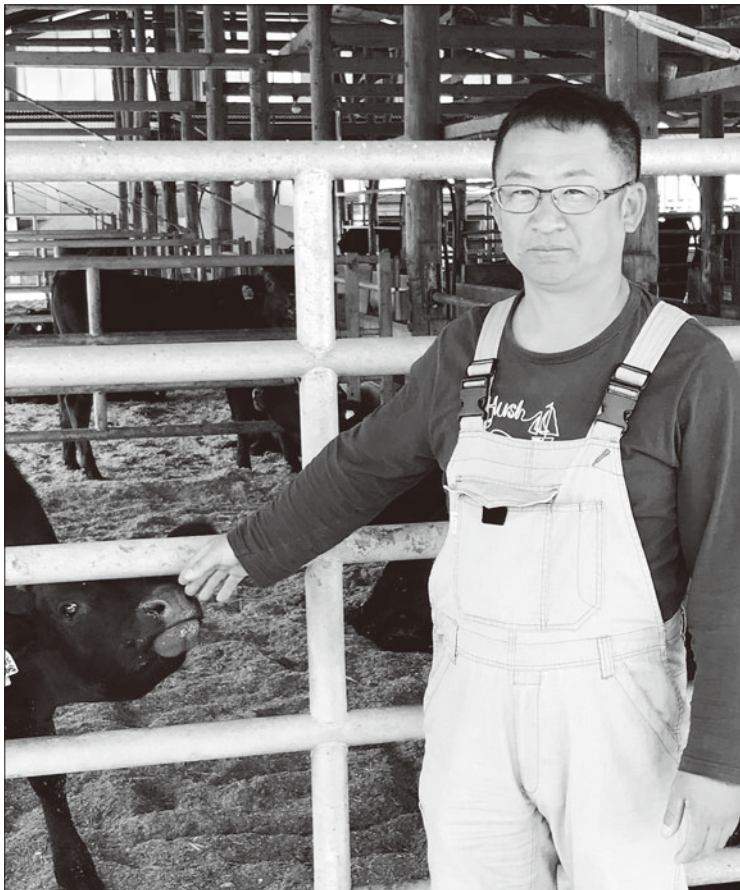
——お父さんの代までは酪農が中心だったそうですね。肉用牛の飼養技術はどうやって学んだのですか。

**有田** 父の時代は、水田3畝に酪農を組み合わせた水田酪農経営で、黒毛和牛もわずかですが飼っていました。私が経営を継いだときには、乳用牛が50頭、繁殖牛が8頭いました。いまは米作りはやっていません。

飼養技術をどこで学んだか。それはヒミツにしたいところですが(笑)、さまざまな人との出会いによって、大きな酪農家で働きました。そこで、牛の「群管理」を学びました。

多数の牛を飼っているが、個別の牛の健康から発情、妊娠、搾乳量までさまざまなデータを把握することの重要性を知りました。

その後、森林組合で造林や育林、伐採などの作業に携わり、その親



繁殖牛の牛舎の前で有田耕一さん=熊本県錦町で

方からは「人の使い方」を学びました。5人でチームを組んで作業をするのですが、チームワークや段取りの工夫次第で、5日かかる仕事を3日で済ますことも可能です。請負仕事ですから残りの2日分は利益になります。作業の段取りをよくすることが、経営上のプラスに直結することを学びました。

牛舎での作業の動線をどのようにしたら、作業が楽になり効率が高くなるか。そんなことを考えるのが楽しいです。

——よそのメシを食うことも大切なですね。

有田 独学ですが、本から学んだのではありません。大規模経営の酪農家、私の育てた子牛を買ってくれる肥育農家、それに畜産の飼育技術のコンサルタント。彼らとの出会いのなかで、多くのことを学びました。彼らと付き合っ、つくづく「餅は餅屋」だと思いました。その道のこと、やはり専門家が一番です。プロフェッショナルとしての彼らの知見を、有田牧場では生かしています。

す。

森林組合に勤めず、家にずっといたほうが、経験が積めてよかつたのではないかと、という人がいます。私はそのとは思いません。家を出て、外で働いたおかげで、いろいろな人と出会え、今日の自分がいるのです。後悔などしていませんし、常にプラス思考です。

### 独自の創意工夫を生かす

——有田さん自身が考えて、工夫した技術もあると聞きました。

有田 どのように管理したら、牛は大きく育つのだろう。そんなことを考えることが、私は好きなんです。たとえば、子牛が元気に育つように、冬に水ではなくお湯を飲ませる装置を考えて設置しました。

寒くなると牛は冷たい水を飲みたがりません。人間だってそうですよ。それなら、お湯を飲ませてみようと。試してみたら、ゴクゴク飲むのです。そこで、お湯を貯めて、牛が好きなときに飲める装置を、友人の資材屋さんや電機屋さん協力してもらいながら自分で作りました。

——それはすごい試みですね。

有田 他にも、繁殖牛の発情を促すため、産んだ子牛をすぐに離すこともやっています。子牛を産んでから次の牛を産むまでの期間を「分娩間隔」といいます。うちの分娩間隔は平均して370日です。全国平均は400日ぐらいですから、当社は30日短い。10年単位で計算すると、よそでは10年間に9頭しか産まれないのに、当社では10頭生まれます。この1頭の差は、経営的に大きいですね。

### 評価の高い子牛を育てる

——有田牧場の子牛は、市場で世間相場より15%以上高く競り落とされ

### Profile

ありたこういち

1977年熊本県錦町生まれ。43歳。高校卒業後、家業の畜産業に就いたが、2001年家業を離れ、地元の人吉地域の森林組合の作業員に。父の急逝で08年に再び家業に戻る。19年度熊本県農業コンクールで、グランプリにあたる「経営体」部門の「秀賞」を受賞。全国肉牛事業協同組合理事。

### Data

株式会社有田牧場

1948年、水田農家だった祖父が乳牛1頭から酪農を始めた。有田耕一氏の父が酪農経営に注力し75年には50頭規模に。その後、肉用牛の生産にも乗り出す。12年株式会社化し耕一氏が社長に就任。現在の飼養規模は、乳用牛が経産牛110頭、肉用牛が繁殖牛440頭、肥育牛70頭。資本金200万円。売上高3.6億円（酪農と肉牛の割合は1対2）。従業員5人。



ると聞きました。なぜですか。

**有田** 牛が持っている遺伝子的能力を調べる「ゲノミック評価」を取り入れているからです。

繁殖牛の産肉能力を数値化したものを「育種価」といい、ゲノミック評価の一部ですが、肉質がいいというお墨付きのついた牛ばかりを後継牛として残してきました。そうすれば、自分の牧場に残っている牛は、品質のいい牛ばかりになります。つまり、自家牛群の改良を続けてきたのです。

その結果、有田牧場の子牛を仕入れて育てると、いい枝肉のとれる牛に育つ。そんな評判が肥育農家に定着しつつあります。それで、市場でうちの子牛が高く競り落とされるようになったのです。

同じように牛を飼っていても、出荷時は他農場の子牛よりずっと高い評価を得て出荷できています。そんな付加価値の高い牛を育てる経営が私の誇りです。これからの農業は高い付加価値をめざすべきだと思います。

### 自給の粗飼料の多さが強み

——牧草などの粗飼料を自給していることが、有田牧場の強みだと聞きました。

**有田** 父は北海道の酪農家に師事し、

粗飼料の自給には北海道の酪農並みに力を入れてきました。昔は粗飼料が余っていて、他の酪農家に分けていたほどです。

しかし、当社の飼養頭数が増えてきて粗飼料が足りなくなってきたので、いまでは地域の耕種農家に稲発酵粗飼料(WCS＝ホールクロップサイレージ)用のイネを栽培してもらっています。主食用米を栽培している農家には、裏作でイタリアンライグラスなどの牧草をつくってもらっています。うちが急速に規模拡大できたのは、自給飼料が豊富にあったおかげといっても過言ではありません。

——自給飼料が多いと、それだけコストも低くなりますね。

**有田** 地域の酪農家や肉用牛農家の平均と比べると、うちのエサ代は、およそ半分で済んでいます。飼料費が生産費に占める割合は、全国平均だと50%程度ですが、うちは25%です。ただ、WCS用の稲を刈り取る大型の農業機械などの費用は別途かかっています。

### 地域農業との連携を大切に

——WCS用のイネを栽培してもらうことで、地域の農地の有効活用につながり、地域農業の発展にも寄与

していますね。

**有田** WCS用のイネは水田農家に栽培してもらっていますが、その見返りに当社が堆肥を無償で散布しています。飼料イネは当社が無償で刈り取っていますが、耕畜連携による国からの助成金は全額、耕種農家に渡しています。

堆肥の散布は、地域内循環を実現するねらいもありますが、大量に出る糞尿の処理を、農地への還元というかたちで実現できることが、規模拡大できる一つの要因にもなっています。

飼料イネの契約面積だけで150畝あります。そのほかに麦わらや飼料用トウモロコシなど、当社がかかわっている自給飼料生産の農地面積は、のべ350畝にのびます。牧草や飼料イネなどの粗飼料を円筒状に梱包したロールペールは、年間4000個消費しています。

——従業員もみなさん地元の人ですか。

**有田** 5人いる従業員の全員が、地元の錦町出身者です。地域との連携ということもありますが、同じ町内の人なら気持ちも通じやすいものです。30歳代の場長には夫婦で働いてもらっていますが、近く独立し、当社の施設を使って黒毛和牛を飼育す

ることになっています。

### 5年後には1500頭規模に

——今後も増頭をめざすのですか。

**有田** 現在は酪農部門の経産牛が110頭、肉用牛部門が繁殖牛が350頭、育成牛が90頭、それに、4年ほど前から始めた肥育牛が70頭います。子牛は年間300頭ほど市場に出荷しています。

5年後をめどとした増頭計画を推進中です。酪農は基本的に現状維持で、経産牛100頭規模のままですが、肉用牛を大幅に増やします。現在、肥育のための第3牧場を建設中で、来年中には完成予定です。5年後までに、肥育牛を500頭、繁殖牛を500頭に増やします。総頭数は、乳牛や育成牛などを含め、約1500頭規模をめざします。

——加工部門への進出やレストラン経営などは考えていますか。

**有田** いまは専門外の分野に乗り出すことは考えていません。将来、提携することはあるかもしれませんが、いまは、よい肉質の牛を育てることに力を注ぎたいと考えています。同業者には、最高クラスの牛を育てることに精力を注いでいる経営者がいて、いい刺激になります。

(ジャーナリスト 村田 泰夫)

